

「三匹獅子舞」の儀礼研究

—舞と登場諸役にみられる民間信仰の特徴—

Study of initiation of Shishimai in Saitama

伊藤 純 (Jun Ito) 指導: 谷川 章雄

東日本に広く分布する「三匹獅子舞」はその多様性は指摘されながらもその実態は明らかなではなく、その儀礼としての意味も問われたことはほとんどない。一方で、芸能史研究という系譜をめぐる学問においては一定の成果をあげてきているといえるが、成立後の展開過程についてはあまり論じられておらず、演目や諸役の成立がどのように展開されてきたか未だ不明確である。この一因として観察されるべき事象がほとんど取り上げられてこなかったことが考えられる。すなわち今後は、従来取り上げられてこなかった演目や登場諸役を研究の俎上にあげていくことが求められる。換言すれば、実際に芸能が行われている現場から議論を立ち上げて、その信仰としての意味と展開を見ていく民俗学の基本とも言える問題意識のもと儀礼研究に臨むべきであろう。このことにより、「三匹獅子舞」研究において新たな展開とその可能性を開拓していく。

第1章では先行研究の整理を行い、「三匹獅子舞」研究における課題を探る。従来、「三匹獅子舞」について芸能史の立場からその成立過程や大陸伝来の獅子舞との比較についての議論が展開されたが、「三匹獅子舞」の儀礼的行為やそれへの信仰については散在的な研究ばかりである。実際には「三匹獅子舞」はシシ以外の諸役が登場したり、「ムラ廻り」や「雌獅子隠し」など複雑な演目構成が認められ、ムラにおける重要な信仰の一つと考えられる。つまり、「三匹獅子舞」研究においては芸能としての性格を考慮しながらもムラの信仰の対象としての性格を持つことを十分に理解しなければならないのである。また、従来一緒にされてきた大陸伝来の獅子舞とは別に個別の芸能として「三匹獅子舞」を取り扱わなければならないと考えるべきである。よって、本研究の目的は「三匹獅子舞」を構成する諸要素を整理し、そこで展開される儀礼的行為を分析することである。

第2章では埼玉県における「三匹獅子舞」の概況を述べた。具体的には演目・登場諸役・運行の構成をみていくことで「三匹獅子舞」の基本構成を確認した。「三匹獅子舞」は大きくわけて、行列を組む「ムラ廻り」と寺社での舞とおおきく分けられ、後者には「三匹獅子舞」の独自の舞として「雌獅子隠し」が挙げられる。また諸役についてはシシ以外の花笠や道化について取り上げ、それぞれ分析す

べき課題を挙げた。

第3章はそれぞれの舞の分析を行った。分析は舞の展開における空間構成に注目した。フィールドワークによって得られた資料を図式化し、舞の構造を分析した。すると「ムラ廻り」という演目については風流踊りとしての神送り儀礼が信仰の特徴として浮かびあがり、「雌獅子隠し」においては神降ろし儀礼として読み解くことができた。このことは風流踊りからの「三匹獅子舞」の独立を意味し、儀礼論的にいえば儀礼の質的転換ともいうべき現象としてとらえられる。芸能史において「三匹獅子舞」の風流踊りとして久しく分類されてきたことに対し、儀礼論的立場に立つとこの分類に異を唱えたことになるであろう。

第4章では登場諸役の分析を行った。風流踊りににおいて中心であった花笠はその形状と行列の位置から、厄神を村の外へ追い出すための依代として考えられる。一方で、シシは村境においてはヘンバイを行いムラの外からの災厄を防ぐ機能をもつことがその所作からわかる。行列における諸役の順番は儀礼的な要求により決められていると考えられ、風流踊りとしての主役は花笠にあり、一方で「三匹獅子舞」においてはその役割を後退させ、その代わりシシが寺社での舞の中心となっていく。換言すると、儀礼の質的転換に伴い、舞の主役の転換が行われたともいえ、「三匹獅子舞」の儀礼の展開の様子を描いた。さらに、「道化」の機能は舞の進行役としての機能を持つほか、棒術は「三匹獅子舞」が芸能として成立したのちに修験道などの影響の下習合していったものと考えられる。こうした、「道化」や棒術は各地域の特性を受けたものといえる。

以上の分析から、明らかになったこととして次の点が挙げられる。

- ① 風流踊りから「三匹獅子舞」という芸能の儀礼の変化の過程
- ② 「三匹獅子舞」における「雌獅子隠し」の意味
- ③ 「三匹獅子舞」の成立とその後の展開のモデル

課題として以下のことがあげられる。本研究は「三匹獅子舞」の儀礼的側面に重点を置いて分析を行った。抽出されたモデルなどは今後、絵画資料や文献史料など芸能史的立場からの検証を要する。また、「三匹獅子舞」におけるシシを解明するにあたり、西日本における動物信仰との比較が必要であろう。